

橋本市中心市街地における 長屋の編年

The chronological order of the tenement houses in the central area of Hashimoto city

平山育男・西澤哉子

HIRAYAMA Ikuo/NISHIZAWA Kanako

キーワード：長屋 天井高さ

Keywords：Tenementtohouse, height of the ceiling

1 はじめに

平成 11（1999）年以後、和歌山県橋本市中心市街地において、歴史的建造物の建築的調査を実施してきた。中でも、平成 17（2005）年度は当該地域に建つ長屋建築を幾棟か扱った。長屋の建築年代が明らかになる場合は、主屋に比べて少ないようであるが、調査を通してその編年指標となるものを探った。本稿はその報告である。

2 橋本市中心市街地における長屋の具体例

橋本市の中心市街地では、近世以来、数々の長屋が造られ続けた。近代以後も鉄道の開通に伴い市街地が拡大したが、この際に長屋が多く建築された。以下、年代順に調査した長屋の数棟について報告をする。

2-① 奥村家長屋¹

・概要

奥村家の長屋は、東家 4 丁目の旧大和街道南側、旧高野街道の西側に所在し、敷地は東家団地の東側となる。敷地は西側が比較的広い市道に接し、東西 70m 程、南北 30 m 程の細長い形状である。この北側に 2 棟の長屋があり、中央に通路を設け南東側に所有者である奥村家の主屋と物置、西側にもう 1 棟の長屋が配される。

長屋は東西に棟を配する木造 2 階建切妻造平入棧瓦葺の形式で、表側に半間、裏側におよそ 1 間幅の下屋を付すものである。1 軒の間口は 2 間半で、これが 6 軒連なるため、全体では桁行 15 間となる。梁行は 2 階の建ち上がる上屋部分の前後に下屋が付き、各戸で背面側への増築があるため一様ではないが、5 間程の規模となる。

1 階の平面は市道から分かれ、敷地北面を通る幅 1m 程の私道に面して入口を前面に設ける。4 枚建の腰付ガラス戸で、下手の西側半間が戸袋となる。入口を入ると、上手東側に折れ込む幅半間、L 字形平面の前土間で、表側から 3 畳、4 畳半の居室を配し、上手に半間の板の間が取り付け、4 畳半下手の押入は一角を区切り仏壇として使われていたようである。更に裏側は 2 畳程の板の間と炊事場を兼ねた土間で、板の間と土間の間は窓枠で区切られる。また、上手に風呂、便所を置いて裏側へ出る勝手口がある。なお、便所は隣接する 2 棟で棟割となる角屋の形式で本屋に附属し、井戸は共同のものが 2 箇所あったという。

2 階へは前土間下手の階段から登る。表側から 4 畳、6 畳で、

6 畳東上手に床、押入が配される。

軸組は京呂組の和小屋組で、各戸境のみ小屋束へ貫が梁行に通されていた。なお、この長屋の表側下屋桁では矩形には製材されない、野材が桁として用いられる。

・復原考察

1 階は当初の形式をよく伝えるが、前土間下手の板の間と、上手の板敷は仕事が新しく後補で、当初は半間規模の前土間と通り土間を復原することが出来る。4 畳半と通土間境は 2 本溝の鴨居が残り、建具が復される。下手の仏壇は中古で、当初は押入に復される。裏側は当初一面の土間で、梁行規模は板の間と土間を区切る 6.7 尺程度で、現存する窓枠裏側には風喰が確認されるため、当初、下屋背面は下手が引違の窓で、上手は 2 本溝の鴨居が残ることから引違の戸に復される。なお、間取によると当初に風呂はなかったという。

2 階平面の改造は少ない。但し、隣家と比較すると、当初、裏側の窓には戸袋と雨戸が復原される。

建築年代を示す 1 次資料は発見されなかったが、小屋組からは無記名で長さ 253 尺、洋釘止めの幣串が発見された。間取によれば、この長屋は 70 年前の入居時、建物は新しかったとのことである。幣串の編年、野材の桁使用などの点を考慮すると、大正時代末期頃の建築と考えるのが妥当であろう。

なお、かつてこの住宅には桶屋が入り、作業場として用いていたという。また、駄菓子屋、キャンディー屋などが他の住戸には入り、増築は各自で行ったという。

・評価

奥村家長屋は 6 戸 1 棟と規模が大きく、大正時代末期頃の建築と考えることができる。比較的残りがよく、当時の生活振りが伺われる。



奥村家長屋 北東より 田村収撮影

2-② 楠本家長屋²

・概要

楠本家他の長屋は、古佐田1丁目に所在し、敷地は橋本駅から西に延びる市道の南側に位置する。

長屋は東西16間、南北6間程の敷地に6戸1棟の建物で、木造2階建切妻平入棧瓦葺の形式である。1戸の規模は、桁行間口は東端の紀北ドライクリーニングが3間半で、他の5棟は2間半とする。梁行は2階の建ち上がる上屋部分が3間で、裏側に約1間の下屋を付すものである。間口2間半部分である東から2戸目、旧平岡家住宅における平面は以下の通りである。

1階の平面は市道に面しては中央に入口として引違のガラス戸を設け、両脇を引違で格子付のガラス戸とする。入口を入ると奥行半間の前土間があり、これがL字形平面の土間となり背面への通土間となる。1階の居室は2室の4畳半が2室前後に続き、背面は板の間で2畳程度の板の間、通土間突き当たりの勝手先に便所が置かれる。

2階は裏側の4畳半上手の階段から登る。6畳2室で、表側6畳の西側にトコと押入が置かれる。

軸組は梁組中央に敷桁が配し、これに登梁の形式で梁行の小屋梁を長屋全体を凡そ6尺程の間隔で割り付けて京呂組で渡し、この上に、母屋束及び棟束が建つ和小屋組とする。なお、東には貫が通されず、小屋材の大半は転用材であった。

・復原考察

以下、旧平岡家住宅部分における復原考察を述べる。

1階は当初の形式をよく伝えるもので、大きな改造は背面炊事場廻り以外ではわずかであった。正面の柱間装置は中古のようで、正面は間口を1本ものの鴨居として、窓、引違戸を区切る半柱は任意の位置に建てる事が出来る構成であった。鴨居

を観察すると西側の半間が戸袋とするように溝が彫られており、当初は4枚建の建具に戸袋とするものと考えられた。また、階段の裏手となる裏側の部屋と下屋境は、現状で開放であったが、柱、無目鴨居に間渡の痕跡があった。板壁であろうか。背面下屋は、西側半分の板敷が新しく、当初は現状の半分ほどの面積と判断され、土間となる部分の側廻り建具は、隣家などと比較すると窓のようである。

2階も当初の形式をよく伝え、改造は背面の手摺りの仕様が変わった程度である。

建築年代であるが、当家の2階小屋裏の棟束表側から幣串が発見された。洋釘止めの無記名で、長さは2.42尺であった。幣串の大きさから判断すると明治時代末頃以後の建築と判断された。但し、2階床板には帯鋸の使用が認められることから、建築年代は大正時代後中期以後と判断するのが妥当である。一方、この建築は東家に所在する奥村家長屋と復原した平面が極めて類似した。但し、

①奥村家長屋では正面下屋軒桁の自然の湾曲を持つ材を用いるが、当長屋では製材した角材を用いる。

②奥村家長屋では正面の下屋上に2階が載らないが、当長屋では正面側では総2階の構成となる

の2点が大きな相違であった。いずれも、当長屋の方が、編年上では年代の下がる傾向を示すものである。奥村家長屋は大正時代末の建築と判断したが、当長屋との年代差は僅かであろう。この長屋も大正時代末と判断するのが妥当であろう。

・評価

楠本家長屋は6戸1棟と規模が大きく、大正時代末頃の建築と考えることができる。奥村家住宅と極めて類似する点が注目される。



楠本家長屋 北東より 田村収撮影

2-③ 旧マルモ食堂（梶川家長屋）

・概要

旧マルモ食堂（梶川家長屋）は古佐田1丁目、橋本駅前通りと交差する上本町通りを西側に入って50m程の場所に位置する。この建物は梶川家が所有する長屋の1軒を占めるものであった。梶川家は現在、旧マルモ食堂（梶川家長屋）の東隣に居住するが、もともとは橋本の本町通り中程、岡本家向かいに位置し、昭和時代初期頃、この地に転居したという。2代前が郡会議員を務め、古くから印刷所を営んでいた。長屋はかつて5軒が東西に連なるものであったが、現在は東側の1軒のみが残る。かつてはマルモ食堂が入っており、住宅地図によれば平成6（1994）年版のものにすでに掲載が見られ、現在は梶川家が家業とする印刷業の倉庫兼作業場として使っている。

長屋の敷地は上本町通りに面して間口13間、奥行10間半程で、背面には土蔵、別棟の長屋等が建つ。敷地には現状では東北隅に調査対象の1棟と、その西側に車庫が配される。

旧マルモ食堂（梶川家長屋）の建物は北面し、東西に棟を配する木造2階建切妻造平入棧瓦葺の形式とする。建物の間口は2間半で、これがかつては5軒連なり、全体では13間程の規模であったと推定される。梁行は、上屋が3間半で、この正面に半間、背面には妻入で1間半規模の下屋があり、更に1間半程の増築部が接続する。

1階の平面は通りに面し両脇に陳列棚を設け、中央に引違の入口を設ける。前面3間半全体が土間の食堂店舗部分で、入口脇東側の一角が寿司カウンターで、西側の壁際に作り付けの椅子が設けられた。背面は厨房で、境にカウンターを設け、東側半間は便所とした。2階へは背面の階段により東から西へ向かって昇った。表側から半間幅の廊下、トコ付きの8畳、6畳広

さの板の間2室が続いて置かれた。

なお、1階は土間からの天井高さが2410mm、2階天井高さは2160mm（7.13尺）とやや低い。小屋組は未見である。

・復原考察

1階は全ての柱が中古以後の材により被覆され復原は難しい。聞き取りによれば、食堂は古くから前側を全て土間とし、東側に南側から昇る階段を付したという。また、当初に風呂はなく、井戸は3軒目背面に位置したという。

2階は表側の廊下が中古で、当初8畳との部屋境には中敷居で窓が設けられた。8畳は当初の形式を良く残す。6畳の板の間は当初和室で、東側に階段が取り付けいたが手摺りの痕跡は見い出せなかった。南側の部屋境は当初中敷居が入り、以南は外部で物干しなどに使われたようである。

建築年代を示す1次資料は発見されなかったが、聞き取りによればこの建物は昭和8（1933）年の建築で、食堂は当初からの店子であったという。

なお、長屋は5戸連棟とするが、全て2間半の規模で考えると敷地に空き地生じる。このため、西側の1戸が3間の規模であったと考えることもできよう。

・評価

旧マルモ食堂（梶川家長屋）はかつて5戸1棟と、規模が大きく、昭和8（1933）年の建築と考えられるが、天井高さがやや低い。

2-④ 上西家長屋

・概要

上西家長屋は橋本駅前を直接西側に進んですぐの、古佐田1丁目3番地に位置する。この建物はかつて橋本駅前で旅館、食堂を営んだ三角亭の持ち物であったものが、所有が代わり現在



旧マルモ食堂 北東より 田村収撮影



上西家長屋 北西より 田村収撮影

表1 橋本市中心市街地における近代の長屋における1階・2階の天井高さ

住宅名	推定建築年代	西暦	1階天井高 [尺]	2階天井高 [尺]	2階床の間	桁
吉川家住宅	大正初		6.2	6.4	×	屋根桁・下屋軒桁野材
奥村家長屋	大正末期		6.5	6.7	○	下屋軒桁野材
赤坂家住宅	昭和初期		6.2	6.7	○	製材・出桁
梶川家長屋	昭和8年(聞き取り)	1933	6.5	7.1	○	
平田家住宅	大正末期～昭和初期		6.8	7.2	○	製材
伊丹組	昭和初期		7.3	7.2	○	塗籠
上西家長屋	昭和1桁台末期		7.9	7.5	○	出桁
北田・柏谷家住宅	昭和10年10月(幣串)	1935	8.0	7.6	○	出桁
楠本家長屋	大正末期～昭和初期		8.0	7.7	○	製材
西野家住宅	昭和10年12月(幣串)	1935	8.0	7.9	○	出桁

注：梶川家長屋は1階天井高を2410mmとして1階床が撤去されている。このため、他の住宅と同様に床高さ450mmを引いた値を尺寸で換算した。

は、東家に住む上西家の所有となるものである。

長屋が建つ敷地は駅前から西に延びる太い市道を背に、JR和歌山線及び南海高野線際に沿って進む小道に向かって北北東面して建つ。敷地は間口15間、奥行は西側で10間程、東側で6間程となる台形型の土地で、敷地南西隅には便所、井戸が置かれ、敷地南面の市道に面した敷地南側には駐車場と別棟の店舗が1軒が配される。

長屋の建物は5戸1棟で、東西に棟を配する木造2階建て、東側を寄棟造、西側を切妻造の棧瓦葺の形式とする。全体の平面は西側の1戸が主屋間口2間半で西側面に下屋が半間取り付き、中3戸が間口各々2間半、東側の1戸が主屋間口3間で東側面に下屋半間が取り付く。上屋梁行は3間半で、この背面には下屋が2間規模で取り付くが、東側2戸は敷地形状成りに斜めに平面を欠いている。

今回調査したのは現在空き家となる西端の1戸と、東から2戸目となる上田理容店の店舗部分である。なお、現在はこの空き家部分を上西家の縁戚が倉庫として現在は用いるが、この住戸は、平成7(1995)年まで喜多家が使用したため、本稿では旧喜多家と称する。

旧喜多家の1階は北面の通りに面し主屋の2間半全面を掃出のガラス戸とし、西側で下屋となる半間を土壁とする。前半間幅が土間で、西側の半間を板の間としてこれが上手西側下屋に配された便所に接続する。居室は1列2室で表側から6畳、4畳半で、下手に半間幅の通り土間が配される。裏側の下屋は上手に手洗いと風呂、下手に台所が置かれる。

2階へは4畳半上手の押入中に配された階段から表側に向かって登る。2階は表側に半間の廊下を置き、6畳2室を配する1列2室の形式で表側は西側に1間半2割間口の床の間を構える。なお、背面は下屋上を物干とする。

1階は土間からの天井高さが2,845mm、9.39尺、2階天井高さは2,275mm、7.51尺とやや高い。小屋組は未見であるが、望見可能な部分から判断すると、間口とは無関係に1間程の間隔で梁が渡され、母屋は前後に2本づつ配する。なお、2階正面の廊下は下屋とし、軒廻りは出桁のせがいで造とする小天井の形式で、屋根勾配は5寸である。

上田理容室は1階表側の奥行2間分全体を土間使いとして店舗に用いる。通りに面した2間半の間口は、西側から半間を嵌殺窓、半間の引違窓で1間の開戸を出入口として用い、残り半間を引違の窓とする。店舗部分は西側壁面に鏡を張り、これに対し西向きに2台、理容用の椅子を配する。南側の壁面にはガ

ラス戸があり、この前に西側からハサミ類の消毒棚、蒸タオル器、湯沸かし、頭の洗い場として、半間を裏側居室への通路とする。東側壁際が客溜まりで、長椅子があり、前には目隠しとして格子が建つ。なお、この西側壁際に研台がある。台は上部の蓋が開き、ここでハサミ、ナイフ類の研ぎ作業を行なう。

・復原考察

以下、旧喜多家住宅部分における復原を中心に述べる。

1階は表側の6畳が大壁の仕様となるなど、中古の改造で多くの柱が被覆されるものの、根本的な改造は少なく、当初は幅半間の前土間と下手の通り土間となり、1列2室の構成は当初以来のものと判断される。また、当初は前土間から土足に履き替え、上手下屋の便所を用いたと判断された。但し下屋は大きく改造を受けている。2階の屋根形式から判断すると下手に位置する1間幅が古い様で、台所天井化粧板隙間からは梁に下に柱を受けた柄仕口を確認することができた。これが更に下屋を持つ形式であったのかまでは判断できなかったが、通土間に通じる土間仕様の台所として用いられ、傍らの上手部分は坪庭的なものであったと判断される。

2階の改造は少なく当初の形式をよく示したが、裏側6畳南側窓から用いる背面の物干しは中古で、当初この窓には手摺が取り付けられたことは、その仕口と持ち送りの痕跡で確認された。また、各戸では戸袋がつくようであるが、少なくとも当該住戸には付かない。

建築年代を示す1次資料は見い出されなかったが、2階正面側下屋を取り込む発達した構成、正面2階軒を出桁にする形式、やや高い2階天井高さ等の点を考慮すると敷地裏側に位置する楠本家長屋よりやや降る、昭和10(1935)年少し前の建築と考えるのが妥当であろう。

なお、便所は敷地南西端に3口が用意されていた。5戸の内、両端の2戸は各戸に備え付けの仕様である。また、隣接して井戸が置かれ、これは協同の利用に供するものであったのだろう。

・評価

上西家長屋は、5戸1棟と規模が大きく、昭和10(1935)年よりやや遡る建築年代と判断される。

3 橋本の中心市街地における長屋建築の編年

3-①立面構成

外壁を真壁造とすることは橋本地区において大正・昭和時代初期建築に関わる長屋建築が持つ特徴の一例として挙げられる

点である。今回取り上げた長屋はいずれもこれに該当し、1、2階ともに当初の真壁造が見て取れる。

ところで、近隣で昭和10(1935)年建築の北田家・柏谷家住宅³及び、西野家住宅⁴では1、2階の軒に出桁を用いる。一方、奥村家長屋、楠本長屋には出桁は見られず、旧マルモ食堂は改造され不明で、上西家長屋には出桁が確認される。また、1階の軒桁には奥村家長屋だけが製材されていない野材を用いる。この点では1、2階の軒桁に野材を用い、大正時代初期と判断された吉川家住宅⁵が奥村家長屋の類似例として挙げる事ができよう。

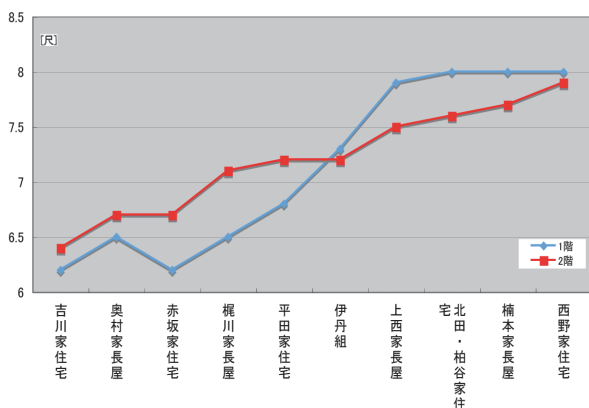
3-②天井高による特色

橋本地区における大正・昭和時代建築の長屋建築では、2階の居室化が進み、天井を設け、採光のための開口部を設け始めている。さらに床の間などの意匠を施すなど、居住性向上の意識もうかがわせていることがこれまでの考察で判明している。

ところで、2階だけの天井高さを比較してみると、前出の大正時代初期頃建築とされる吉川家住宅は6.4尺とかなり低く、床の間等も備えていない。また、昭和時代初期頃建築の旧赤坂家住宅⁴は天井高が6.8尺であり、当初より床の間を設けていた。一方、昭和10(1935)年建築の北田家・柏谷家住宅は7.3尺、同時期に建築された西野家住宅では7.9尺と十分な高さで天井を設け、床の間は当初より備え、居室としての整備は完成しているといえる。

つまり、大正時代初期頃では2階天井高さは6尺台とかなり低く、居室としての整備にとどまっているものの、これが昭和時代初期に入ると、2階天井高は7～8尺台と十分な高さとなり、床の間などの意匠も当初より設けるようになる傾向にあると考えられよう。

図1 橋本市中心市街地における長屋の天井高さ



4 さいごに

このように橋本市中心市街地の長屋建築においては、1,2階の天井高さなどによる編年の可能性が高いと言えよう。

注記

¹ 西澤、平山、御船、梅嶋：奥村家長屋について 橋本の長屋建築10、和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究52、平成19年度日本建築学会近畿支部研究報告集、785～788頁、平成19(2007).6

² 西澤、平山、御船、梅嶋：楠本家長屋について 橋本の長屋建築11 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究その54、日本建築学会2006年度大会(九州)学術講演梗概集F-2、81～82頁、平成18(2006).9

³ 平山、御船、梅嶋、西澤：旧北田家・柏谷家住宅について 和歌山県橋本市の長屋建築-、民俗建築120、46～53頁、平成13(2001).11

⁴ 西澤、平山、御船、梅嶋：分割された西野家住宅について 橋本の長屋建築7 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究その36、平成17年度日本建築学会近畿支部研究報告集、785～788頁、平成17(2005).6

⁵ 西澤、平山、御船、梅嶋：吉川家住宅について 橋本の長屋建築9 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究49、日本建築学会2006年度大会(関東)学術講演梗概集F-2、19～20頁、平成18(2006).9